昔、それはそれはお金持ちの家がありました。使っても使ってもお金は全然減りません。

「もうお金なんか要らない！」

と思っているのに、どんどんたまるばかりです。

そこでお金持ちは貧しい人たちにお金を貸してあげることにしました。そのとたん、お金持ちの家にたくさん人がおしかけてきて、ご飯を食べる暇もありません。

「弱ったなあ。このままではゆっくり寝ている暇もない。」

と思ったお金持ちはいろいろ考えて、

「これはお金がありすぎるからだ。貧乏になれば、のんびり暮らすことができる。」

と気が付き、こんな貼り紙をしました。

《お蔭様でお金もほとんどなくなりました。今日限りお金を借りた人はもう返さなくてもけっこうです。》

貼り紙のおかげで家に来る人もいなくなり、やっと静かになりました。

「さあ、これで貧乏になれるぞ。」

ところが、もともとお金持ちの家だったので、立派な道具や骨董品がたくさんあり、売ればたちまちお金がどっさり入ってしまいます。

そこで、これも近所の人にただで配り、屋敷の庭に生えている見事な植木も切り倒して薪にしてしまいました。ついでに庭のあちこちにある大きな庭石まで取り除くことにしてしまいました。

お金持ちは

「これで貧乏になってのんびり暮らすことができる。」

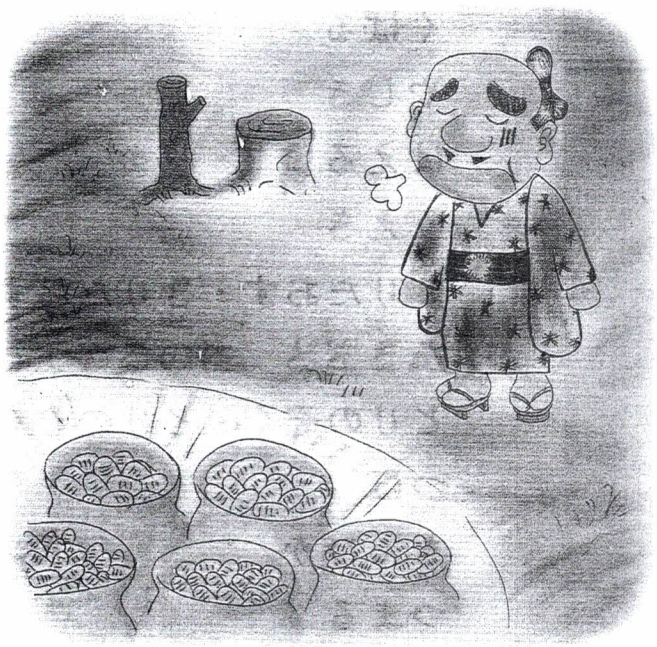
と、喜んでいました。すると、取り除いた庭石の下から大きな壺がいくつも出てきました。びっくりして蓋を開けると、金ピカの大判小判がどっさり詰まっています。蓋の裏には

《これを子孫に残す》

と書いてありました。

「なんてことだ！　貧乏したいとこんなに頑張っているのに、わたしはよっぽど運の悪い人間だ。」

と、何度も溜め息をついたそうです。



出典『仏力先師談 故事、おもしろい昔話 上』孫良華著、弦良出版社

つかずの鐘

昔、西陣の報恩寺の近くに、一軒の織屋がありました。その織屋には若い丁稚と織子がいました。この二人はとても仲が悪く、顔を合わせれば、けんかばかりしていました。そして、いつも丁稚が負けていました。丁稚は何とかして織子をぎゃふんと言わせてやろうと、知恵を絞りました。

「ふふふ、いいことを思いついたぞ。」

その次の日、二人はまたつまらないことでけんかを始めました。

「報恩寺の暮れ六の鐘は八つしか鳴らない。」

と丁稚が言えば、

「いいえ、九つです。わたしはちゃんと数えたんだから、間違いないわ。」

と織子が負けずに言い返します。いつまでたってもきりがないので、二人は日暮れを待って、鐘を数えることにしました。

丁稚は始めから、自分が間違っているのが分かっていたので、報恩寺へ行って、鐘をつく寺男にきょうだけ八つにするように頼みました。

日暮れになって、鐘が鳴り出しました。

「さあ、よく聞いて。絶対九つなんだから。きのうも九つだったんだから。」

織子は自信満々です。

ところが、六つ、七つ、八つ……。鐘は八つしか鳴りません。

「はっはっは、おれの勝ちだ！　ざまあ見ろ！」

「え、なぜ。どうして。きのうまでは確かに九つだったのに……。」

次の日、報恩寺の鐘楼で織子が死んでいるのが見つかりました。

丁稚は織子をだましたことをとても後悔しました。でも、もうどうにもなりません。

それからは、この報恩寺の暮れ六の鐘は鳴らなくなりました。

出自『仁カ先師説故事．おもしろい昔話上』孫寅華 著、致良出版社

大昔のことです。神様が動物たちとこう約束しました。

「来年の一月一日の朝わたしのところへ早く来たものから順位交代で毎年いちばん偉い動物にしてやろう。」

それを聞いた動物たちは大喜び、大はりきり。ところが、ネコは神様のところへ行く日をすっかり忘れてしまいました。そこで、ネズミに尋ねました。

「ネズミさん、神様のところへ行く日はいつだっけ？」

すると、ネズミは「ネコさん、それは一月二日だよ。」とうそをつきました。

さあ、いよいよ一月一日元旦の朝になりました。朝早く暗いうちからウシは神様のところへ行きました。ウシは歩くのが遅いので、他の動物に遅れてはならないと思ったからです。

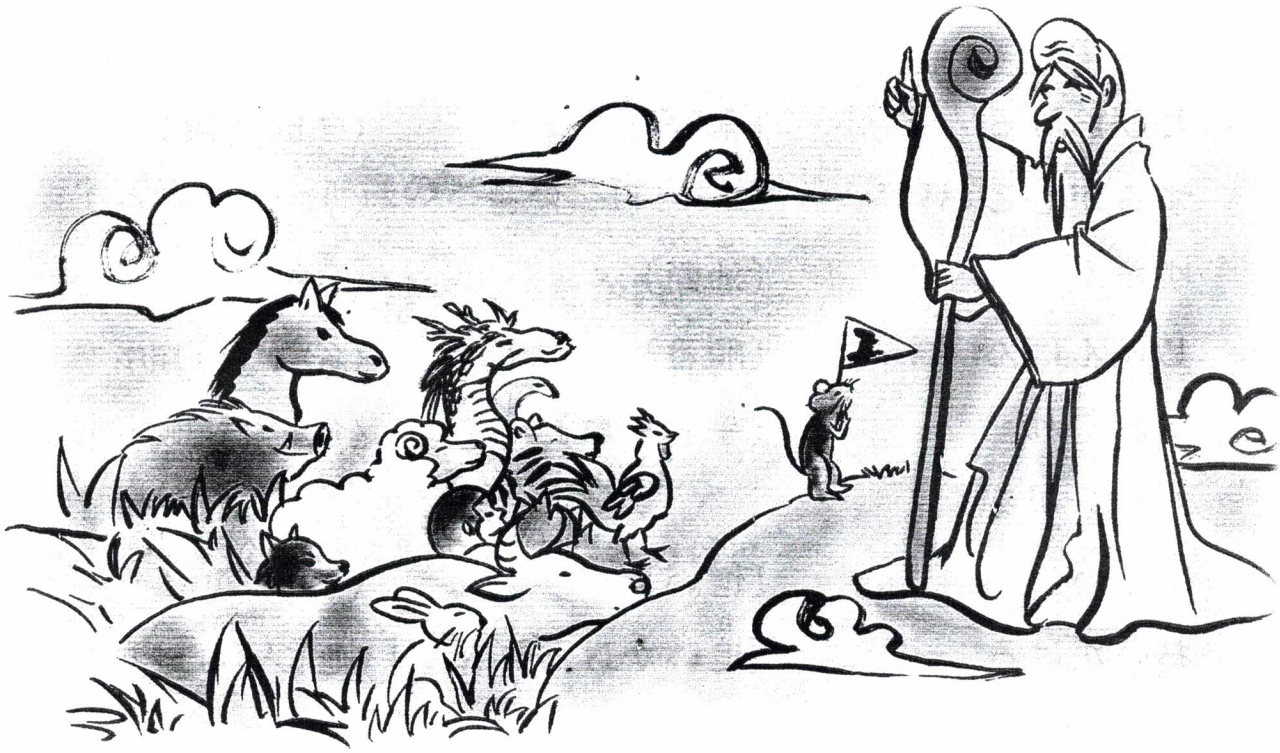
ようやく神様のところへ着いた時、ウシの背中からネズミが飛び降りました。ずるがしこいネズミはウシの背中に乗って、やって来たのです。

一番はネズミ。ウシの次はトラ、ウサギと続きます。足の速いウマやイヌは油断をしたのでしょう、後の方になっ

てしまいました。こうして、その年のいちばん偉い動物になる順番が決まりました。

次の日ネコが神様のところへやって来ました。でも、もう手おくれです。12匹の動物はもう決まってしまいました。

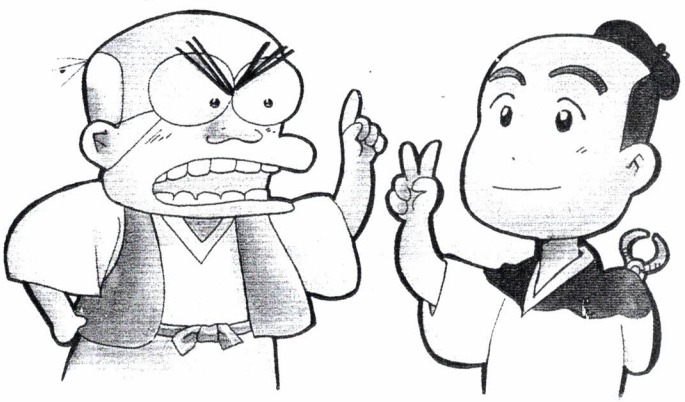
ネコはそれはそれはくやしがりました。それ以来、ネコは憎いネズミを見ると、追いかけるようになったのです。



出自『仏教説話 おもしろい昔話上』孫寅華著、致良出版社

けちんぼうの虫歯

昔、あるところに虫歯を抜く名人がいました。昔はお医者さんがいなかったので、虫歯が痛くなると、名人のところへ行って、抜いてもらったのです。この名人が抜くとちっとも痛くないというので、大変な評判でした。



さて、この名人の家の近くに息をはくのももったいないと言うくらいのけちんぼうがいました。このけちんぼうも虫歯になりました。ひどい虫歯で痛くて痛くてたいへんです。でも、お金を出すのがいやで、ずっとがまんしていました。きょうになってとうとう名人のところへやって来ました。

「虫歯を１本いくらで抜いてくれる？」

「１本２文です。」

「何？！　１本抜くのに２文もとるのか？」

「そうです。２本で４文、３本で６文という計算になります。」

「それは高すぎる！　１本１文にまけろ。」

名人はほんとうはとてもいい人で、お金がなくて困っている人にはお金をとらずに抜いてあげることもあります。でも、この男は有名なけちんぼうです。

「まけることはできません。いやなら、帰ってください。」

しばらく考えたけちんぼうは言いました。

「そんなら、この歯といっしょにもう１本抜いて、２文にまけてくれ。」

２本で２文なら、１本１文という計算になります。なんというけちんぼうでしょう。

名人はあきれてしまいましたが、すぐに承知して、虫歯を抜きました。それから、もう１本虫歯ではない丈夫な歯を抜きました。

「いてて……。」

けちんぼうは痛くて飛び上がりました。

それでもけちんぼうはこれで１文もうけたと喜んで帰って行きました。

出自『仏力先師説故事 おもしろい昔話』上田孫良著、致良出版社